

## 論文要旨

学位論文題目：LINE の会話における相づちの研究—日韓母語場面と日韓接触場面との比較から—

氏名：倉田芳弥

会話において話し手が重要であるのはもちろんのこと、話し手が話を進めていくためには、聞き手からの反応が不可欠で、聞き手の反応の一つに相づちがある。会話において重要な役割を果たす相づちは、音声会話だけでなく、LINE によるチャットの会話でも見られる。日本語母語場面だけでなく接触場面での利用も増えている LINE の会話に見られる相づちは、同期性や送信システム、非言語情報の欠落など媒体の特性の影響を受け、音声会話とは異なる可能性があるが、その実態は明らかではない。本論文は LINE の会話における相づちの特徴を明らかにすることを目的とし、日本語母語場面、韓国語母語場面、日韓接触場面における相づちの特徴を明らかにした。

研究 1 では頻度について分析した。日本語母語場面は韓国語母語場面よりも相づちの頻度が高く、音声会話と同様の結果が得られた。日本語母語場面では相づちを頻繁に送信し、話し手と共に会話を進める共話的な話の進め方、韓国語母語場面では、相づちを頻繁に打たずに話を聞くという対話的な話の進め方が、LINE の会話でも見られることがわかった。日韓接触場面では、韓国人非母語話者（以下、KNNS）よりも日本語母語話者（以下、JNS）の方が相づちの頻度は高く、JNS も KNNS も母語場面での相づちの打ち方を接触場面でも維持していることがわかった。

研究 2 では表現形式について分析した。日本語母語場面では、概念的表現や繰り返しが多く、具体的に反応を示して積極的な関わりを示す共話的な特徴が見られ、韓国語母語場面では、感声的表現が多く、早く反応を示して臨場感を示しつつ、話し手の発話を邪魔しない対話的な特徴が見られた。日韓接触場面では、感声的表現は KNNS の方が多く、概念的表現（その他）は JNS に多く、また JNS、KNNS ともに相づちだと認識しやすい定型的概念的表現（ソ系）が多く見られた。接触場面では、JNS も KNNS も、母語場面の特徴を維持しつつ、談話の分かりやすさも重視していると考えられる。

研究 3 では機能について分析した。日本語母語場面、韓国語母語場面ともに、「感情の表出」が最も多く、「聞いている」が最も少なかった。「感情の表出」が多いのは、非言語情報の欠落を補うためであり、「聞いている」が少ないのは、送信システムにより話し手の発話の途中に相づちを挿入できないためだと考えられる。日韓接触場面の JNS と KNNS にも同様の傾向が見られ、機能には、媒体の特性の影響による LINE 会話独自の相づちの特徴が見られることがわかった。また、接触場面では、JNS も KNNS も「理解・了解」を多く用いて情報伝達も重視しており、母語場面とは異なる特徴も見られた。

研究 4 では出現箇所により送信方法に違いがあるか調べるため、出現箇所、送信方法、出現箇所

別送信方法の点から分析した。出現箇所と送信方法について、日本語母語場面では、離れたメッセージに対する「非直後」の相づちが多く、送信方法は、相づちと実質的な発話を一緒に送信するものが多く見られ、メッセージと相づちが離れても、多くの反応を具体的に示す共話的な特徴が見られた。一方韓国語母語場面では、出現箇所は「直後」が、送信方法は「単独」が多く、頻繁に相づちは送信せず、メッセージの「直後」に「単独」で相づちを送信して、発話の連鎖が複雑にならないようにしており、「話し手」と「聞き手」の立場が明確な対話的な特徴が見られた。日韓接触場面の出現箇所については、JNSは「非直後」が多く、非母語話者は「直後」が多かった。また送信方法は、JNS、KNNSともに「単独」が多く、KNNSに合わせるJNSの調整が見られた。出現箇所別送信方法は、日本語母語場面、韓国語母語場面、日韓接触場面のJNS、KNNSのいずれも出現箇所により送信方法を変えており、媒体の特性の影響を強く受けていることがわかった。発話の連鎖が複雑ではない「直後」の相づちは「単独」が多く、同期性を高めることを重視するのに対し、発話の連鎖が複雑な「非直後」の相づちは、相づちと実質的な発話を共に送信することが多く、実質的な発話の内容から、どのメッセージに対する相づちであるかを認識しやすくしていた。送信方法には談話展開に関わる働きが観察され、発話の連鎖の複雑さにより使い分けが見られた。

以上、LINEの会話の相づちには、実現の仕方は異なるが、音声会話と同様の特徴が見られた。音声会話と同様、LINEの会話という文字を介した会話においても、日本語母語場面の相づちには共話的な特徴、韓国語母語場面には対話的な特徴が見られ、日韓接触場面でも、母語場面で見られた共話、対話という会話のスタイルの維持やJNSとKNNS双方の調整が見られるなど、音声会話の接触場面と同様の現象が見られた。一方で、LINEの媒体の特性の影響によるLINEの会話独自の特徴も観察され、相づちの働きに関わる側面においてその特徴が見られた。LINEの会話における相づちを分析することにより、相づちの普遍的な側面だけでなく、LINEの会話独自の特徴という相づちの個別的な側面も見られることが明らかとなった。